

# 日本細菌学会

## 関東支部ニュース

第20号

### 第70回日本細菌学会関東支部総会開催にあたって

第70回日本細菌学会関東支部総会を本年11月5日および6日の2日にわたって開催すべく、準備を進めております。日本細菌学雑誌の会報欄でお伝えしましたように、本会の会長である第一製薬(株)探索第一研究所所長長田恭明は、本年4月15日に急逝しましたが、評議員会のご厚意により、長田会長の名のもとに、私が会長代行を務めさせて戴くことになりました。長田会長の遺志を継ぎ、有意義な会にしたいと念じております。

近年の分子生物学や免疫学の急速な進歩は、細菌学の領域においても多くの新しい展開を可能とし、現在の私たちは極めて多くの情報を手に入れることができます。このような背景のもと、感染という事象を宿主と細菌の相互作用という観点に立ち返って見直してみたいというのが、本会を企画するにあたっての基本姿勢であります。この考えに沿って、特別講演と二つのシンポジウムを設定しました。もう一つの観点として、企業の研究者が細菌学をはじめ関連諸学問の発展に果たした役割は決して小さいものではないとの認識から、本会を企業の研究機関でなされた優れた研究を紹介する機会とすることを考えております。本会が、関東支部に所属する多くの企業研究者が支部の活動に現在以上に参画する契機となることを願っております。このことは、本会の運営を私共におまかせ下さった島村支部長はじめ評議員の方々のご期待にも沿うことと考えている次第です。

特別講演ではバンダービルド大のBlaser教授に、胃潰瘍および胃癌の発生との関連から *Helicobacter pylori* の病原性について講演

総会長代行 早川 勇 夫  
第一製薬探索第一研究所所長



していただきます。シンポジウム1は「実験感染をめぐる」と題して、生体を舞台として宿主と寄生体の相互作用を解析する様々なアプローチが紹介されます。シンポジウム2の「サイトカインおよび免疫調整剤の感染症への展開」では、免疫系を介した感染症の制御の可能性に関する最新の知見が紹介されますが、シンポジストは全員が企業の研究者で構成されております。一般演題にも多くの興味ある演題が寄せられております。

学会準備の途上で会長の急逝という不幸に見舞われましたが、島村支部長はじめ評議員の方々および多くの会員の方々の暖かいご支援を賜り、準備も最終段階に入ることができました。この場を借りて厚く御礼申し上げます。最後に、多数のご参加により本会を盛り上げていただきたく、会員の皆様をお願い申し上げます。稿を終わらせて戴きます。

## 浅川賞を受賞して

明治の隠れたベストセラーの一つに「逆境の恩寵」という本がある。著者の徳永規矩は私の祖父であるが、徳富蘇峯や芦花の従弟にあたり、熊本英学校などで活躍中結核にたおれ、以後16年間病床に伏し、赤貧洗うがごとき中で43才の生涯を閉じた。死後出版された上記の本は、結核を病む人々にひろく愛読され、版を重ね、口語訳も出された。

その子、つまり私の父も結核を患った。幼少の頃も学生時代も、結核で苦労した。

私も結核に罹った。戦争中熊本の第五高等学校の寮生活で、食料不足と連日の重労働で学生は疲労困憊し、結核で倒れる者が続出した。私も微熱が続き、校医は私の背中から注射筒いっぱい胸水を抜いてみせ、生命を保証しないと宣告した。機銃掃射や爆撃の下、長崎市の自宅で私は辛うじて安静を守り、高校1年に復学できた。復学があと1年おくれでいたなら、私は原爆で生命を失っていたことだろう。

私が医学を志したのは、父が「いまは戦争で人々が互いに殺し合っている時代だが、中には人の生命を救う人がいてもよい」と勧めてくれたからであった。九大の医学部を卒業して、私は細菌学教室（戸田忠雄教授、武谷健二助教授）へ入った。私に与えられたテーマは結核菌で、最初の論文はBCG接種に関するものであった。やがて予研の結核部から声がかかり、東京へ移って本格的にミコバクテリアの研究に取り組むこととなった。

当時の杉並や品川は、畑や牛舎が多く、その土を集めて、沢山の結核菌のフェージを分離した日々を思い出す。これらフェージのDNAがミコバクテリアにトランスフェクトすることを見出し、ついで水口康雄博士らとともにミコバクテリアの性的接合系を発見した。

ツベルクリン室長になった頃から宿主の応答に興味をもち、多くの協同研究者とともにツベルクリン反応やマクロフェージの実験をおこなった。やがてBCGによる癌免疫療法

徳永 徹  
(前国立予防衛生研究所所長)



が一世を風靡し、その作用機序の研究からBCGのDNAに強いインターフェロン誘導能とNK活性化能があり、抗癌効果が著しいことを見出した。そして、このDNAに対するマウスやヒトの応答が、DNAのソースにより異なり、微生物や無脊椎動物由来のDNAには強烈に認められる応答が、脊椎動物や植物のDNAに対しては認められないことを明らかにした。

この3月、予研の所長を退官する直前に学会（加藤延男総会長）から浅川賞をいただいた。それはこの40年余のミコバクテリアに関する研究の全体、とくにDNAの宿主応答の研究（詳細は細菌学会誌に掲載予定）に対するもので、感謝のほかない。御推挙下さった斎藤和久先生、理事会・選考委員会の諸先生、祝辞を賜った大村智先生などにお礼を申しあげるとともに、長年苦楽を共にした協同研究者の各位に深い謝意を表したい。そして今、こうして原稿を執筆しながら、親子3代にわたって続いた結核菌との不思議なめぐり合わせに、しみじみと思いをめぐらせている。

「ニーズとシーズの交流」

大正製薬総合研究所

大村 貞文

近頃の科学雑誌を見ると、宇宙科学や分子生物学関係の特集記事がよく目につき、その領域の進歩の早さを伺うことができる。

宇宙や銀河の大きさ、構造、進化などがX線衛星、天文赤外線衛星、宇宙探査機などの新しい観測装置やデータ解析機器の発達によって次第に明らかとなり、我々の宇宙観もかなり変化した。一方、生命科学の分野でも電子顕微鏡、X線、核磁気共鳴、質量分析、バイオ関連機器等の応用により、生命体の微細構造と機能が分子レベルまで次々と解明されている。そして新しい発見に合わせ、PCR、アンチセンス、遺伝子治療などの新しい技術の応用が試みられている。我々が直接間接に見る世界のサイズも原子から宇宙まで広がり、多くの発見や発明が新しい機器や技術の発展に負うところが大きいことにも驚かされる。

昔は機器を自分で組立て、改良し、その原理を熟知して使ったものだが今はメーカーとユーザーの専門化が進み、ユーザーが機器の原理を熟知せずに使うため、応用面でその機能がフルに活用されていないように思われる。

最近、我々は抗生物質クラリスロマイシンのヒト尿中活性代謝物や活性型ビタミンD<sub>3</sub>の調製に微生物を用い、ワンステップで目的の水酸化体を得ることに成功した。その際、HPLCにおける各種ピークの photodiode-array による三次元UVスペクトル解析と質量分析との組み合わせがその同定に大きな威力を発揮した。このような経験は誰にもあることと思う。

現代は新しい機器や技術をいかに早く自分の研究に取り込み、応用するかが新しい発明や事業展開の要になることが多い。従って、我々は学際領域の技術の発展や新しい機器、技術、試薬などの応用に目を向け、シーズに関する知識を深めると共に、ニーズに応じてそれを活用することが重要であろう。

学会においても新しいニーズとシーズの情報交流が一層深まることを願うものである。

「臨床検査における最近の話題」

昭和大学医学部臨床病理科

中村 良子

感染症の診断における最近の話題といえはやはり遺伝子診断が実用段階に入ったことでしょう。殊に、PCR法の実用化は、革命的な出来事と言っても過言ではありません。

19世紀以来現在に至るまで、細菌検査の基本は分離培養・同定ですから、結果判定までに早くても2日は必要です。それが、培養不要、検体から直接、しかも微量の、基本的には1個の微生物でも検出可能というのですから、大きな期待が持たれて当然と申せましょう。1980年後半から開発が始まったばかりのPCR法ですが、驚異的な速さで応用化が進められ、感染症のみならず、遺伝病、癌などの診断、法医学、親子鑑定さらに考古学などに及ぶ各分野における貢献は測り知れないものがあります。

感染症の遺伝子診断は、結核、ウイルス性肝炎、AIDS、STDなど実用化が急がれ、一部は検査室で行うことが可能となりました。PCR法による *Chlamydia trachomatis* のDNA検出、分離培養された菌の16SrRNAを用いた核酸Hybridizationによる *Mycobacterium tuberculosis* および *Mycobacterium avium complex* の同定は、non-RIAで約1時間で行なうことができるようになりました。感度、特異性とにも優れている遺伝子診断法の導入は、画期的なものとして期待されている一方、普及のブレーキとなっているのはコスト高です。しかし、結核患者は現在でも年間5万人が新規に登録されている現状を考えますと、一日も早く、検体から直接検出可能となることが望まれます。山口恵三先生（東邦大学）の試算によりますと、迅速検査を導入して適切な早期治療を開始した場合、従来法の検査で入院を余儀なくされた場合に比し、年間約100億円の医療費節減が可能になるそうです。

迅速診断は、コスト高にみえても感染症治療のカギとなり、結局はコストベネフィットにつながるものです。

## 「大腸菌 O157:H7 による集団下痢の時代背景」

埼玉県衛生研究所

奥山 雄介

今やわが国は、終戦直後の食うや食わずの庶民生活と、日常茶飯事に発生していた伝染病流行時代をやっと乗り越え、社会資本の拡充と生活環境の整備も整い、公衆衛生も質的向上へと進展してきた。そのような中で、“疾病構造の変化”などという言葉も流布されて久しい。特に、伝染病をはじめ感染症全般の問題も、医学・公衆衛生の中心的課題からぐっと隅に追いやられ、まさに疾病構造の変化というより、社会構造の変化に伴い、という方が適切な表現である。

バブル経済がはじけたとはいえ、なおわが国は世界の経済大国であり、長寿社会の到来がこれまた近未来の社会問題になっている程恵まれた状況にある。さらに、国際化時代が進むにつれ、海外渡航者も年間 1,000 万人以上にものぼっており、また、輸入食糧品やその関連物資も否応なしに増加しているのが現状であろう。

国内で何とか伝染病の撲滅も近ずき、安全で豊富な食糧に囲まれ、あとは散発的に発生する輸入感染症や食中毒を監視していけば、それで感染症全般もこのまま自然消滅的な傾向を辿るものと、多くの人は信じていたと思う。しかし、病原ウイルス学の分野では AIDS が国際的問題となったり、細菌学の分野では海外渡航者による輸入感染症の漸増傾向もみられ、さらに輸入食品類が原因と推測される食中毒及び伝染病の増加も危惧されはじめた。

そのような矢先、1990 年 10 月、浦和市の S 幼稚園に水系感染による腸管出血性大腸菌 O157:H7 の集団下痢症事件が発生した。ほんの一部の専門家以外は、たかだか病原大腸菌程度の疾病で、こんな大事件を引き起こすとは“晴天の霹靂”だったと思う。強烈な病原性を発揮する Vero 毒素産生の大腸菌 O157:H7 とその仲間達、実践 epidemiologist & bacteriologist としては生涯忘れられない細菌となった。今なお関係者にとって、まだ生々しい事件であり、過去の事例とはなっていないことを申し添えたい。

## 「獣医細菌学の教育・研究の立場から」

日本獣医畜産大学

高橋 勇

獣医学が対象とする動物は多種類であり、例えば哺乳類では牛、馬、豚、綿羊等の産業動物、犬、猫等のコンパニオンアニマル、兎等の実験動物、各種野生動物があり、鳥類では鶏や鳩その他の愛鳥鳥類等、さらに水生動物のイルカや魚類にまで及ぶ。

これらに感染症をおこす微生物は、ウイルスから細菌、真菌に至る極めて多種にわたり、細菌だけを取り上げても各動物種固有のものから宿主域の広いものまで多種類である。したがって獣医細菌学の範囲は広く、教育・研究の両面で多くの問題を抱えている。紙面の都合上、ご参考までに私の教室の教育・研究の現状について以下若干を紹介したい。

まず、教育面では獣医師の社会での活動分野が、産業動物や小動物の臨床、家畜衛生及び公衆衛生の各分野、研究・検査機関（獣医学や医学系の大学、国公立研究所、製薬会社や飼料会社の研究所等）、その他と広範なので、これらに適応できるような内容が必要である。

その内容は、第一に畜産の集団飼育化に伴う各種伝染病が多発していることから、それらの病原菌に最重点をおき、次いで個体別に発生頻度が高い感染症の原因菌や人獣共通感染症の原因菌（サルモネラ、炭疽菌、ブルセラその他）にも重点をおき、その他の病原菌も考慮に加えた教育をしている。講義内容は細菌学的性状はもちろん、検査法や診断法、薬剤感受性と耐性の実態、症状の概要に至るまでスライドを用いて、実際面に役立つように配慮している。同時に実習に力を注ぎ、重要な菌については、同定検査も行なわせている。

研究面では、家畜特に豚のサルモネラ保菌の実態と血清型について、過去 10 数年にわたって調査し、検出菌の薬剤耐性とプラスミドの研究も行なっている。また、豚丹毒菌の病原学的、免疫学的な研究、哺乳類、鳥類のパスツレラ感染症の疫学と診断に関する研究ならびに各種動物病原菌のニューキノロンに対する感受性に関する研究なども行なっている。

## 「私の研究室」

神奈川歯科大学口腔細菌学教室

梅本俊夫

私の研究室がある神奈川歯科大学は風光明媚な三浦半島の横須賀市にあって学生 720 名と大学院博士課程 72 名それに教員と付属病院の歯科医師合せて 235 名とから成る歯学部だけのこじんまりとした単科大学です。

研究室である口腔細菌学教室は、研究棟の 6 階にあって、東側の窓から東京湾を往来する船や晴れていれば房総半島を眺めることが出来ます。現在、教室には私以外に講師 1 名助手 4 名および大学院生 5 名が居り、総勢 11 名で研究と教育に当たっています。

教室の研究テーマは「歯周病原細菌の特定と病原因子の解明」ですが、このテーマは現在歯科医学領域で最も関心がもたれているものの一つで、全国 29 の歯科大学や歯学部における微生物学教室の大半がアプローチの方法は異なっているにせよこのテーマに取り組んでいると言っても過言ではありません。

このことは、第 63 回関東支部総会（平成 2 年）のシンポジウムテーマで採り上げられたことや、今年の細菌学会総会でもシンポジウムテーマの一つになっておることからも分かると思います。

このテーマに関して、私の研究室では、対象を *Porphyromonas (Bacteroides) gingivalis* にしぼって、各病原因子の病原的意義を明らかにするため、1) 定着因子としての線毛 (fimbriae) の役割を線毛遺伝子不活化変異株を作製することにより検討しているほか、2) 現在不明であるリポ多糖の歯周組織細胞に対する活性とりわけ歯周病の特徴的病変である歯槽骨の吸収に係わる破骨細胞の分化誘導能について検討しているところです。

研究対象が口腔常在菌であることから、細菌学会の大半の方々にとってはなじみの薄いテーマではありますが、歯科医学領域においては重要なテーマでありますので、今後ともこのテーマに沿って研究を進めていきたいと考えております。

## 「保健学部における臨床検査技師教育」

杏林大学保健学部

金森政人

保健学部という名前は耳にされても、その内容はあまり知られていないのではないのでしょうか。この紙面を借りて PR させていただきたいと思います。私共の保健学部は臨床検査技術学科と保健学科をもち、臨床検査から環境汚染や社会福祉まで健康にかかわることを幅広く扱っています。臨床検査の領域に限ってみても、医療技術の現場は益々多様化、専門化してきています。生化学検査や生理機能検査などに比べて自動化、機械化が遅れ、時間のかかることが泣き所である微生物検査においても技術革新はめざましく、DNA 診断法を含めてさまざまな迅速検査法が開発されています。そこでバイオテクノロジーなどの先端科学技術教育が課題となってきます。私共の学部では「遺伝子検査法」を新科目として開講し、感染症や遺伝性疾患の検査に対応するための基礎知識や基本技術を教えることにしております。

次に臨床検査技師の国家試験に触れてみたいと思います。現在、全国臨床検査技師教育施設協議会に加盟している 4 年制大学および 3 年制の短期大学、専門学校は合わせて 78 校あります。国試受験者は平成 3 年度でみますと 5,282 人で、合格者は 3,146 人（合格率 59.6%）です。合格率からも分かりますようにかなりの難関であり、国試対策に教員も苦勞しております。こうして毎年 3,000 人以上もの検査技師が誕生してゆき、この中にはもちろん微生物検査の道を選ぶ者もいます。細菌学会においても DNA 診断に関するシンポジウムが度々開かれております。多くの技師がこうした会に気軽に出席し、討論できることを希望しておりますし、学生に対しても検査室に閉じこもらず積極的に研究に参加するよう指導してゆきたいと思っています。

## 「国立予防衛生研究所の移転をめくって」

国立予防衛生研究所細菌部

中村明子

「引っ越しは無事に終わったのですか」、「新しい建物の住心地はいかがですか」、などと会う人毎に尋ねられて半年が経過した。

1992年9月7日に始まった国立予防衛生研究所（予研）の移転は10月20日に終了した。新しい建物は新宿区戸山の「戸山庁舎」と武蔵村山市の「村山庁舎」に分かれて建てられた。1985年度の国家予算で厚生省所属の三つの研究所、すなわち国立予防衛生研究所、国立健康・栄養研究所および国立医療・病院管理研究所の「三研合築」が決定されてから移転完了までに7年半が経過したことになる。移転直前の7月には予研の組織も大幅に改められ、「村山庁舎」にはワクチンや血液製剤の国家検定に関わる主要組織を集約したため長年住み慣れた「品川庁舎」からの移転は「村山庁舎」と「戸山庁舎」に別れ、「村山庁舎」から「戸山庁舎」への移転も加わって、職員はスケジュールに振り回された。

感染症の研究を基盤とする予研の移転は、細菌、ウイルス、寄生虫、昆虫等の感染性材料の大量の移動を伴うことになる。放射能や危険薬品等の輸送に関しては法的規制があるものの、病原体の輸送に関しては国際郵便法があるのみである。大量の病原体の移動に先立って予研では病原体輸送の基準を作成した。研究者は病原体の保管状況について研究所内の安全監視委員会の査察を受け、病原体は委員会によって一括輸送された。研究所で行なわれたこれらの一連の手続きは誠に厳格で、研究者同志の馴れ合いは全く許されなかった。

近隣住民に望まれない状況下での移転には、我々研究者が建前と本音を使い分けることなく、安全性に対しては必要以上に配慮せざるを得なかった。この姿勢は移転後に引き継がれ、「病原体等安全管理規定」にもとずいて日常の研究が行なわれている。

病原体や遺伝子の実験に反対する人々は安全性に不安を持ったためである。今後は開かれた研究所として住民の理解を求める努力をしなければならない。

## 「私立薬科大学の微生物学免疫学教育」

明治薬科大学微生物学教室

新井俊彦

大学がその専門分野で働く社会人を養成するためにあるのは言うまでもない。卒業生の進路は大学によって異なるが、私の大学では半数強が製薬関係の企業に、三割が病院あるいは調剤薬局、一割強が教育研究機関や公務員になる。企業での仕事は創薬、安全性研究、臨床開発、営業に大別される。従って、これらの進路全てに役立つ微生物学、免疫学の基礎知識を与えることが求められる。

感染症、アレルギー、自己免疫疾患、癌発症の分子メカニズムの現在の知識とそれらの研究法の原則を教えなければならない。代表的な疾患について、症状、原因、治療法の記述のみでは無意味で、原因がどのような分子メカニズムでそれぞれの症状を起こし、どの分子反応にわれわれは人為的に干渉できるか、干渉する分子はどのような構造と機能を持つ必要があるのかを考えさせる必要がある。すなわち、生命現象、疾病現象の分子メカニズムの中から薬剤の標的にできるタンパクを捜す方法を例を上げて説明するのである。

4年生の卒業研究のテーマも本人の希望進路に応じて勧めることにしている。これは時代の要求に応じて変化するが、現在は、教育・研究機関を希望する者はPCR診断を用いる研究を、病院薬剤部を希望する者は薬剤の副作用を細胞内情報伝達系などを指標にして*in vitro*で評価する方法を用いる研究を行っている。もちろん、製薬企業を希望する者はそれぞれの特定の癌、アレルギー、自己免疫疾患の分子発症機構の解明に関する研究をテーマにしている。大学院生も卒業研究のテーマを深めた内容の研究を行っている。

私立大学では教員当りの学生数が多い。初心者である4年生に良い卒業論文研究指導をしようと思えば、自分独自の研究の時間を作ることは困難である。従って、卒業研究のレベルを高めて自分の研究にせざるを得ない。若い教員は自分の研究に関連した内容のみを指導するから良いが、私はその他のテーマを指導しなければならないから大変である。

## 集 会 案 内

- 平成5年度日本微生物株保存連盟(JFCC)総会  
日時:平成5年7月9日(金) 10:00~17:00  
場所:東京農業大学グリーンアカデミーホール  
問合せ先:〒156 東京都世田谷区桜丘1-1-1  
東京農業大学総合研究所菌株保存室 岡田早苗  
☎ 03-5477-2549
- 第9回「細菌の病原因子とその分子遺伝学」研究会  
世話人:筑波大学基礎医学系微生物学 林 英生  
日時:平成5年7月12日(月) 13:00~  
場所:筑波大学医学専門群臨床講義室A つくば市天王台1-1-1  
問合せ先:〒108 東京都港区白金5-9-1  
北里大学薬学部微生物学教室 担当:関矢  
☎ 03-3444-6161 内線3321 FAX:03-3442-5674
- 第40回毒素シンポジウム  
日時:平成5年7月21~23日(水,木,金)  
場所:花びしホテル 函館市湯川町1-16-18  
問合せ先:700 岡山市鹿田町2-5-1 世話人:小熊恵二  
岡山大学医学部細菌学教室 第40回毒素シンポジウム事務局 担当:友近  
☎ 086-223-7151 内線2273 FAX:086-222-1815
- 第11回微生物シンポジウム(日本薬学会)  
日時:平成5年7月22、23日(木,金)  
場所:千葉市文化センター 千葉市中央区中央2-5-1 ☎ 043-224-8211  
問合せ先:263 千葉市稲毛区弥生1-33  
千葉大学薬学部微生物薬品化学研究室第11回微生物シンポジウム実行  
委員会 委員長:沢井哲夫 ☎ 043-251-1111 内線2717
- 第4回日本生体防御学会  
日時:平成5年7月29~31日(木,金,土)  
場所:野口英世記念会館東京都新宿区大京町26 ☎ 03-3357-0741  
問合せ先:〒108 東京都港区白金台4-6-1  
東京大学医科学研究所細菌感染研究部内  
日本生体防御学会事務局 金ヶ崎士朗 ☎ 03-3443-8111 内線313
- 第22回薬剤耐性菌シンポジウム  
日時:平成5年8月26、27日(木,金)  
場所:伊香保温泉「観山荘」  
問合せ先:〒371 前橋市昭和町3-39-22 演題締切り:7月1日  
群馬大学医学部薬剤耐性菌実験施設 担当:伊予部  
☎ 0272-31-7221 内線2584 FAX:0272-32-2285
- 第38回ブドウ球菌研究会  
日時:平成5年9月3、4日(金,土)  
場所:京都市国際交流会館京都市左京区粟田口鳥居町2-1 ☎ 075-752-3010  
演題締切:平成5年7月10日  
問合せ先:〒607 京都市山科御陵中内町5  
京都薬科大学 微生物学教室 西野武志 ☎ 075-581-3161 内線301

# 委員会からのご挨拶

## 組織検討委員会

委員長 笹川千尋

本委員会は島村会長のもとで昨年から新設された委員会で、まだ活動状況や方針をご報告出来るまでにはなっておりません。本委員会の名前が示すように、“組織（システム）”の見直しを検討する場でありますので、委員会での討論は最小限度にとどめ広く会員の皆様からのご意見をいただき、評議員会全体で討論し進めて行きたいと考えています。また本委員会も支部会の活性化を目的に絶えず組織を検討して行きますが、同時に日本細菌学会全体の活性化へ役立つ具体策を提言することが出来ればと願っております。と申しますのも関東支部会は、1,400余名の会員を有する巨大な組織でもあります。また、会の活性化には、他支部に先駆け前支部会長の徳永先生の御努力で4年前から積極的に取り組み、その成果は支部総会等で実証済みであります。ですから支部会の声細菌学会全体へ波及し、それが細菌学会あるいは関連学問領域の発展に少しでも寄与出来ればよいと思います。幸い細菌学会の方でも、以前にも増して活性化への気運が高まりつつあります。これから会員の皆様のご意見やご批判をいただきながら、組織の見直しを通じて活性化に努力して行きたいと思っております。

さてこの機会に評議員会でこれまで本委員会に関連して話し合われたことを簡単に紹介し、ご報告にかえさせていただきます。昨年9月に第1回の小委員会を持ち評議員会で“細菌学会の活性化を目指して”という自由討論会をさせて頂きました。これは細菌学会の組織検討委員から支部へ、活性化へ向けて理事会制度の見直しのお話が降りてきた事から端を発しています。当日は支部総会の会長報告でおられた川上先生と金ヶ崎先生も討論に加わり、活発な意見が多くの方から出されました。紙面の都合上話題となったものをキーワードの形で挙げてみます。理事会制度の改

革（選挙制度、年齢の若返り、活動等）、学会活動の活性化（会員の交流促進、会期の工夫、発表形式等）、他領域との交流促進（微生物全般と関連先端領域との交流、共同研究の促進）、産学交流の促進（研究、人材、資金の活用）、専門分野の偏り是正（学会にアメリカASM方式の導入：関連分野の取り込み）、科研費増額（基礎研究の拡充）、若手研究者の育成（大学院生、若手研究者の研究支援）、広報活動の充実（学術集会、講演、講習会の促進、細菌学雑誌の拡充）。この様に話題は多岐に及び、支部の活性化に活かせるものから細菌学会全体で考えてよいものまで実に様々なアイデアが出されました。ただし第18号の支部ニュースの編集後記で「その理念を口で語ることは容易でも具体策は意見が分散」と指摘されたように、学会のシステムの見直しのみで活性化が出来るわけでもありませんし、これぞと言える具体的な解決策が飛び出したわけでもありません。しかし今多くの人が学会の活性化を益々真剣に考えていることを、改めて確認できたことは大きな収穫となりました。今後は皆様からご意見をいただき（直接あるいは支部ニュースを通じて）、十分討議を重ねて具体的な形にまとめて行きたいと考えております。

ところでもう一つの最近の話題は、島村会長のご発案で本支部会に“名誉会員（仮称）制度”を設けることを検討しております。これは会の活性化とは別の次元で、現職を去られた先生方を支部総会へお招きして親睦を図るのが目的です。名称や資格はこれからの検討課題ですが、これに関しても皆様からご意見をお聞かせ頂ければ幸いです。最後になりましたが、本委員会のメンバーには、光岡知足、岡村登、島田俊雄、五十嵐英夫、池田達夫の諸先生がおられます。

よろしく願いいたします。



## <集会報告>

第9回〔細菌の病原性とその分子遺伝学〕研究会は、ストレス蛋白質（熱ショック蛋白質）を取り上げ、その研究現状についての情報交換を目標として平成5年7月12日（月）午後1時から6時まで、つくば市の筑波大学で開催された。あいにくの雨模様であったが、関東地区のみならず九州、広島方面からも出席者があり、約90名の参加者があった。特別講演は、由良隆先生（HSP研究所）による「*E. coli*の熱ショック蛋白質」について研究最先端を含めた解説と、山田毅先生（長崎大学・歯・口腔細菌）による「*Mycobacteria*の熱ショック蛋白と病原性」について過去20年の歴史を振り返りつつの解説講演であった。各菌種の研究現状は、*Shigella* について戸邊亨（東大医科研）、*Yersinia* については山本友子（杏林大・微生物）、*Salmonella* は阿部章夫（北里研）、*S. aureus* は太田敏子（筑波大・微生物）、*Legionella* は宮本比呂志（産業医大・微生物）、*Bordetella* は遠藤正彦（北里大・薬・微生物）らが、それぞれの研究を紹介した。

## 議 事 録

### 臨時評議員会

日時：平成5年4月20日（火）17時～18時

場所：昭和大学

出席者：新井俊彦、五十嵐英夫、池田達夫、井上松久、伊予部志津子、金森政人、河野恵、笹川千尋、竹田多恵、檀原宏文、鶴純明、野沢龍嗣、辨野義巳  
欠席者：内山竹彦、岡本登、奥田克爾、北野繁雄、黒坂公生、島田俊雄、三上襄、光岡知足

議題：

#### 1. 第70回総会長の件

長田恭明氏の急逝に伴い第70回総会長について話し合いがもたれた結果、会長代行をたて現状通り第一製薬が主催することに決定した。

### 第5回評議員会

日時：平成5年1月30日（土）14時～17時

場所：昭和大学

出席者：新井俊彦、五十嵐英夫、池田達夫、奥田克爾、金森政人、河野恵、笹川千尋、竹田多恵、檀原宏文、鶴純明、野沢龍嗣、光岡知足、川上正也（第69回総会長）、長田恭明（第70回総会長）

欠席者：井上松久、伊予部志津子、内山竹彦、岡本登、北野繁雄、黒坂公生、島田俊雄、辨野義巳、三上襄

議題：

#### 1. 第69回総会準備状況報告

川上総会長より準備状況について説明がなされた。

期日：平成5年6月24、25日（木、金）

会場：グリーンホール相模大野

プログラム：

第1日（24日）

一般演題（午前）

シンポジウム（午後）

DNA診断の現状と未来

第2日（25日）

一般演題（午前）

シンポジウム（午後）

体液性感染防御因子をみなおす

懇親会：講演終了後（無料）

一般演題募集方法

演題申込締切期日：平成5年3月13日

申込先：

〒228 相模原市北里1-15-1

北里大学医学部分子生物学

川上正也

☎0427-78-9116 FAX0427-78-8441

プログラムは4月10日発送予定

#### 2. 第70回総会準備状況報告

長田総会長より準備状況について説明がなされた。

期日：平成5年11月5、6日（金、土）

会場：日本薬学会会長井記念館（渋谷）

会費：参加費 正会員：3,000円

学生会員：1,000円

抄録集 予約：1,000円

当日：1,500円

懇親会費 2,000円

プログラム:

一般演題講演 10 分, 討論 5 分程度

シンポジウム

- I 「実験感染をめぐって—宿主と寄生体の相互作用の解析—」  
座長: 山口 恵 (東邦大学医学部微生物)  
大谷 剛 (第一製薬探索第一研)
- II 「サイトカインおよび免疫調整剤の感染症への展開」  
座長: 東 市郎 (北海道大学免疫科学研究所)

特別講演

「ヘリコバクター・ピロリの病原性」

Dr. Martin J. Blaser

Director, Professor of Microbiology  
Division of Infectious Diseases  
Vanderbilt University, Nashville, TN  
座長: 長田恭明 (第一製薬探索第一研)

一般演題

締切期日: 平成 5 年 8 月 20 日必着  
予稿集申込締切: 平成 5 年 9 月 10 日  
プログラムは 10 月 1 日発送予定

3. 各委員会報告

- 1) 新井編集委員長より支部ニュース 19 号発行準備状況の説明がなされた。
  - 2) 野沢学術委員長より, 第 71 回, 第 72 回総会長は学会への貢献度などを加味して選考したいとの報告がなされた。
  - 3) 笹川組織検討委員長より理事会および名誉会員 (仮称) 制度について問題提起がなされ, 活発な討論がなされた。
  - 4) 北野事業計画委員長; 特になし。
4. 第 4 回評議員会議事録の承認

<人事消息>

寺山武先生 東京都衛生研究所微生物部長  
退職 (1993.7.15), 予防医学協会へ転出。  
工藤泰雄先生 東京都衛生研究所微生物部長  
に部内より昇任 (1993.7.16)。

<計報>

新島恭樹先生 日本 BCG 製造顧問  
元(株)日本凍結乾燥研究所工場長 (66 才)  
平成 5 年 1 月 18 日心不全のため逝去。  
御自宅: 小山市粟宮 2468  
☎ 0285 - 45 - 0672

長田恭明先生 第一製薬探索第一研究所所長  
(53 才)

平成 5 年 4 月 15 日逝去。

御自宅: 千葉市花見川区千種町 367-26  
☎ 043 - 250 - 0842

山本郁夫先生 杏林大学名誉学長, 野口英世  
記念会会長 (83 才)

平成 5 年 4 月 21 日心不全のため逝去。

御自宅: 新宿区弁天町 75 パビオン Y 401  
☎ 03 - 320 - 5964

◇編集後記◇

この夏, またカルカッタを訪れた。貧困, 疾病, 文盲, 因習等の問題は少しも改善されていない。血のにじむ努力を尽くしてもそれが報われない国である。絶望の中でただ石仏のようにうずくまっている人を見て, その解決の道の遠さに呆然とする思いがした。しかし, ネール首相は, 「これらの難問を解決できるのはただ "Science alone"」という言葉を残していた。科学の偉大さ, 科学者に期待されている責任の重さを初めて知った思いがした。インドだけの問題ではなく, 世界に共通する科学者の使命である。本号は, 近年新しく展開している優れたご研究の数々をご寄稿戴いた。科学研究の面白さを広く知っていただけのような原稿を集めてみたいと, 関東支部にこだわらず各支部の方々にもお願いするよう編集委員会でもまとまった。課題との出合い, 魅力, そしてその意義や成果をお書きいただいた。科学者冥利に尽きる先生方の研究への熱い思いをお楽しみ頂けたら幸いです。(T. T.)

---

日本細菌学会  
関東支部ニュース  
第 20 号  
(1993.9.30)

発行: 日本細菌学会関東支部  
〒142 東京都品川区旗の台 1-5-8  
昭和大学医学部細菌学教室内  
☎ 03 - 3784 - 8131

---